

と四肢の潰瘍や壊疽を形成し、切断に至ることもまれではない。

【目的】バージャー病の進行と喫煙との関連について調査する。

【方法】対象は新潟県内のバージャー病の特定疾患登録患者で調査に協力が得られた218名(男203名,女15名)である。平均11.9年間調査した。発症年齢は44歳(男43.9,女44.7歳)で、経過中に切断術に至った症例の臨床像,喫煙状況を重回帰分析で検討した。

【結果】初診時のFontaine分類は,Ⅰ度21人,Ⅱ度42人,Ⅲ度56人,Ⅳ度89人で,切断術を施行された患者はそれぞれⅠ度0人(0%),Ⅱ度8人(19%),Ⅲ度11人(20%),Ⅳ度49人(55%)であり,Ⅳ度の患者で切断術の頻度が大であった($P < 0.0001$)。また,切断術に関して年齢,性差,発症年齢,禁煙の実施,内科的治療の内容,初診時のFontaine分類,家族歴の計9項目のうち,重回帰分析では初診時のFontaine分類のみが独立した予後規定因子であった($P < 0.05$)。また,Ⅰ度の患者では,切断術は回避された。

【考察】今回の調査では禁煙により四肢や指趾切断が回避されることは確認されなかった。症状がFontaineⅠ度レベル時期の早期診断早期治療が,切断術の回避に結びつくと考えられた。

6 下殿動脈狭窄による間歇性跛行

田崎 麻子・悴田 亮平・会澤 彰
藤田 聡・池田 佳生・北沢 仁
高橋 稔・石黒 淳司・佐藤 政仁
岡部 正明

立川総合病院循環器内科

症例は80歳男性。平成11年10月頃より1000m歩行にて左殿部痛出現(FontaineⅡ),平成11年10月29日下壁心筋梗塞にて当院紹介入院。入院時聴診上,左臍径部に血管雑音が認められた。左ankle brachial index(ABI)は0.9であった。慢性閉塞性動脈硬化症(ASO)疑われ,下肢血管造影施行し左内腸骨動脈,左外腸骨動脈,左下殿動脈に有意狭窄を認めASOの診断。その

後100m歩行にて間歇性跛行出現するようになり,平成12年1月25日左外腸骨動脈90%狭窄に対しpercutaneous transluminal angioplasty(PTA),stent留置術(Palmaz stent 8.0×12.7mm Palmatz stent 8.0×8.5mm Palmatz stent 7.0×9mm)を施行し0%に改善した。PTA後も300m歩行にて間歇性跛行認められたため平成12年4月10日左下殿動脈90%狭窄にPTA,stent留置術(MLK 3.5×15mm)を施行し0%に改善した。左下殿動脈のPTA後症状の消失を認めた。平成12年12月頃より200m歩行にて左殿部痛認められASO再燃。ABI左0.91右0.98であった。平成13年1月16日下肢血管造影にて左大腿動脈90%狭窄,左下殿動脈90%の再狭窄を認めた。左下殿動脈にPTA施行し0%に改善し症状の消失を認めた。本人根治治療希望にて平成13年4月3日左大腿動脈90%狭窄にPTA,stent留置術(Easy Wall 8.0×20mm)施行し0%に改善。ABI左0.96であった。平成13年8月頃より間歇性跛行認めた。ABI左1.00右1.06であった。平成13年10月30日下肢血管造影施行。左外腸骨動脈,左大腿動脈に再狭窄認めず。左上殿動脈99%の新規病変と左下殿動脈に90%の再狭窄を認めた。左上殿動脈99%狭窄にPTA,stent留置術(Easy Wall 5×25mm)左下殿動脈90%狭窄にPTA施行し各々25%以下に改善し症状消失を認めた。本症例は,間歇性跛行の責任病変が下殿動脈に認められた貴重な症例であったので報告した。

7 左内胸動脈のSequential bypassについて

曾川 正和・名村 理・中山 卓
島田 晃治・林 純一

新潟大学大学院医歯学総合研究
科呼吸循環外科学分野

冠動脈バイパス術において,動脈グラフトの長期開存率が静脈グラフトより良好であることより,近年,動脈グラフトを多用することが多くなった。新潟大学医学部附属病院第二外科でも同様な傾向があるが,特に,in situとして使える動脈グラフトは両側内胸動脈と胃大網動脈の3本と数